# 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

| | | 要　　旨 |
|---|---|---|
| 学位申請者 | 岡村佳代<br>【比較社会文化学専攻　平成２２年度生】 | 本研究は日本社会のグローバル化とともに増加しているニューカマーの子どもを対象とし彼らの困難の現状を把握し、その困難に対する対処行動、ソーシャルサポート、ハーディネスを明らかにすることである。第1章、第2章では、ニューカマーの子どもを取り巻く環境を把握するために、日本社会のグローバル化の現状、ニューカマー家族、日本の学校、地域社会の特徴を概観した。第3章では、日本におけるニューカマーの子どもに関する研究動向を5つの側面から整理し概観した。第4章では、「対処（コーピング）」「ソーシャルサポート」「ハーディネス」「人と環境の適合」という本研究に関連する諸理論について概観し、研究課題を述べた。これらを踏まえ、第5章から第7章では、ニューカマーの子どもの困難と対処行動について検討した。困難、対処行動を質的分析した後、量的調査を実施し困難6因子、対処行動5因子が抽出された。中学生と高校生の比較では、困難には質的な差異が示された一方、対処行動には差異がみられなかった。困難と対処行動の関連からは、周囲の異文化への理解や日本人の友人との関係が重要であることが示された。第8章では、ニューカマーの子どもが困難対処の際に実際にアクセスし、活用しているソーシャルサポートの構造と機能を明らかにした。第9章では、日本で成長したニューカマー青年の持つハーディネスについて検討し『ルーツ受容』『過去受容』『現状肯定』『未来開拓志向』の4つの要素があることが示された。第10章では、「人と環境の適合」という観点から得られた結果を総合的に考察した。本研究の意義は、地域コミュニティにおけるインフォーマルなソーシャルサポートの実態やニューカマーのハーディネスという彼らの持つ強さに焦点をあて、それらを示し検討したことである。 |
| 論 文 題 目 | ニューカマーの子どもの困難対処とその資源<br>－ ソーシャルサポートとハーディネスを中心に－ | |
| 審 査 委 員 | （主査）加賀美常美代　教授 | |
| | 内藤俊史　教授 | |
| | 大森美香　教授 | |
| | 浜野隆　准教授 | |
| | 荒木美奈子　准教授 | |